

教育の視点からみた幼稚園・保育所・認定こども園における プール遊びの現状と課題

Current status and issues of playing in a pool at kindergartens, nursery schools,
and certified children centers from the viewpoint of educational perspective

岡澤 哲子*

Tetsuko Okazawa

The purpose of this study was to examine the current status and issues of playing in a pool at kindergartens, nursery schools, and certified children centers from the viewpoint of educational perspective. The survey forms were mailed to public and private kindergartens, nursery schools, and certified children centers (336) in the “N” prefecture, and 229 were collected (reply rate of 62.4%). The results were as follows:

- (1) Playing in a pool was practiced with the strongest aim in the area of “Human Relationships.” Furthermore, it was practiced with the weakest aim was in the areas of “Environment.”
- (2) Kindergartens were significantly more focused on the safety education and on the plan of instructions than nursery schools regarding playing in a pool.
- (3) The number of children enrolled in kindergartens, nursery schools, and certified children centers and the types of pools were affecting how the children played in the pool and improvement of the basic swimming skills. Since it is not easy to change the number of the children enrolled and the type of the pools, it should be considered important to nurture “power toward learning” through playing in a pool in early childhood.

はじめに

幼稚園・保育所・認定こども園では、主に夏季に保育時間内にプール遊びが取り入れられている。しかし、園所によって使用しているプールの形態等に相違がある中で、各園所のプール遊びはどのようなねらいをもって計画・実施されているのであろうか。

園所における設備としてのプールの設置に関して、幼稚園設置基準（文部科学省、2014）および幼保連携型認定こども園の学級編成、職員、設備及び運営に関する基準（内閣府ら、2019）では、「水遊び場」の設備を備えるよう努めなければならないと明記されている。保育所の設備及び運営に関する国の基準の条例制定状況は、水遊び場の設置やプールの設置は明記されておらず、都道府県の一部にプールを設置する場所を確保する条例が明記されているのみである。

また、保育所保育指針（厚生労働省、2017）や幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府ら、2017）において、「プール遊び」に関連した語句としては、事故防止及び安全対策に関連する「プール活動・水遊び中」での事故防止の取り組みとして述べられているのみである。ねらいや内容においては、「プール遊び」という語句は用いられていない。さらに幼稚園教育要領（文部科学省、2017）では「プール遊び」という具体的な語句が全く用いられていない。

一方、現場の保育実践内容としてプール遊びを実施することに至ると推測される保育のねらい

* 帝塚山大学 教育学部教授

が、いくつかの領域の中で記載されている。例えば、乳児保育における「健やかに伸び伸びと育つ」「身近なものに関わり感性が育つ」の側面では①身体感覚の育ち、②見る・触れる・探索する主体的な行動、③身体の諸感覚による認識を豊かにするという3点のねらいが関連していると考えられる。また、1歳以上3歳未満児また3歳以上児の保育に関わるねらいでは、「健康」「環境」「表現」の3領域における次の7点のねらいが関連していると考えられる。

- ① 様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。
- ② 見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。
- ③ 身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。
- ④ 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。
- ⑤ 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- ⑥ 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。
- ⑦ いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。

藤田（1998）は、プール遊びの中に様々な擬音語とそれに伴うリズムがありそれを子どもたちは学んでいるとし、プール遊びには音楽に関する表現の領域においても学びがあると述べている。渡部ら（2017）は、水遊びが、領域「環境」と「表現」との統合の可能性を持っていると述べている。これらのことからプール遊びは保育の5領域が相互に関連をもつ総合的な遊びとして充実できる可能性をもっているのではないかと考える。すなわち、園所で実施されているプール遊びを通して保育のねらいが領域をわたって総合的に達成される遊びとして意識化する保育実践が求められていると考えられる。

さらに、平成29年告示の幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿（以後は「10の姿」とする）が新しく示され、また、平成29年告示の保育所保育指針の改定により、第1章総則の4に「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」にも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿が新しく示された。すなわち、民秋ら（2017）が述べるように、それぞれが独自性をもちながらも、幼稚園も保育所も認定こども園も乳幼児の教育施設であると示されたのである。そのような状況の中で、保育現場ではほぼ実践されているプール遊びという活動を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とどのような関わりをもって実践したらよいのかも、あらためて明確にする必要があるのではないだろうか。すなわち、プール遊びを教育的な視点から検討することも必要ではないかと考えられる。

加えて、三井（2013）は、泳ぐという運動文化は遊びの中でまず呼吸法の指導をすることが必要であると、小学校以降の体育科における水泳との関連では、幼児期には基礎的な技能習得の重要性があることを報告している。また、藤田ら（2017）は幼稚園・保育所では水遊びに関わる施設面で大きな差異があり、水遊びの内容は施設面での制限があり、水遊びの範囲が中心であるという実態を報告している。これらの報告から、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の基礎となる「幼児教育において育みたい資質・能力」が小学校の体育科とどのように接続していけばよいのかも明らかにする必要があると考えられる。

そこで、本研究は、幼稚園・保育所・認定こども園でのプール遊びが、どのようなねらいをもって実施されているのかその実態を明らかにし、教育的視点からプール遊びの課題を検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象園所

N県の公私立の幼稚園・保育園（所）・認定こども園367園に、調査用紙を郵送にて依頼し回答を回収した。回収数は229園、回収率は62.4%であった。回答があった園所数の内訳は表1の通りである。

2. 調査項目

1) 基本情報の質問項目

①公立か私立か②園種③月齢別在園児数④乳児と幼児別のプールの形態（外部プールを使用・たらい・組み立て式・施設プール）を記入する項目であった。

表1 回答があった園所数内訳

	公立	私立
幼稚園	72	27
保育所(園)	48	45
認定こども園	26	11
合計	146	83

2) プール遊びのねらいに関する質問項目

質問項目を表2に示した。質問1～3までは「健康」、質問4～5は「人間関係」、質問6は「環境」質問7は「言葉」「表現」の5領域を意識した質問とした。質問の文言は幼稚園教育要領等の各領域の「ねらい」の語句を基本として作成した。質問8と9はプール遊びにおけるカリキュラムマネジメントの有無を問うものであり、質問10は個人差への対応の有無、質問11は遊び道具の工夫の有無で、質問3と質問8～11の質問項目は保育者の援助について問うものである。質問12は入水時間、質問13は技能面についての質問とした。質問12と13は施設面での相違が要因となって異なるのではないかと予測したための問いである。

回答方法は、質問番号1～13に関しては、4点「非常にあてはまる」・3点「まあまあ当てはまる」・2点「あまり当てはまらない」・1点「全く当てはまらない」の4件法での回答とした。質問番号14は、保育所保育指針等に記載されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を記載通りの番号をつけて並べ、その中から上位2つを選択してその番号に○をつける方法とした。

表2 質問項目

1	プール遊びで十分に体を動かして遊んでいた。
2	プール遊びで伸び伸びと行動し、充実感を味わえた。
3	プール遊びでの安全教育は十分にできた。
4	子ども達はプール遊びを楽しみにしていた。
5	友だちや先生と楽しみながら様々なことに挑戦しようとしていた。
6	水のふしぎさや水の性質を発見したり楽しんだりしていた。
7	プール遊びのことを楽しく話したり、絵などで表わしたりした。
8	プール遊びの内容については年齢に合わせてあらかじめ決めておいてから実施した。
9	プール遊びの内容を深めていくよう指導した。
10	プールの経験がある園児とそうでない園児の個人差に対応する保育内容を実践できた。
11	プール遊び遊具の種類が少ないので独自で工夫した。
12	十分な入水時間の確保ができた。
13	5歳児ではほぼ全員潜ったり、浮かんだりすることができるようになった。
14	幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿のうちで、プール遊びとかかわりが深いと考えて取り組んだもの上位2つを選んで○をつけて下さい。

3. 調査時期：2018年3月～6月

4. 統計処理：データ分析はIBM SPSS Statistics ver.23を使用した。

結果と考察

領域に関する項目得点の比較、保育者の援助及び技能面に関する項目得点の比較（園種および在籍園児数別）、公立と私立の比較（全項目及びプールの形態等）の結果から考察する。

1. 領域に関する項目得点

質問1～3までを領域「健康」の回答とし得点の平均を算出した。質問4～5は領域「人間関係」の回答とし得点の平均を算出した。表3は各領域の平均と標準偏差を示したものである。図1に各領域の項目の得点の平均を示した。

表3 各領域のデータ表示

領域	平均値	度数	標準偏差
健康	3.53	228	0.50
人間関係	3.90	228	0.30
環境	3.06	227	0.59
言葉・表現	3.48	228	0.58

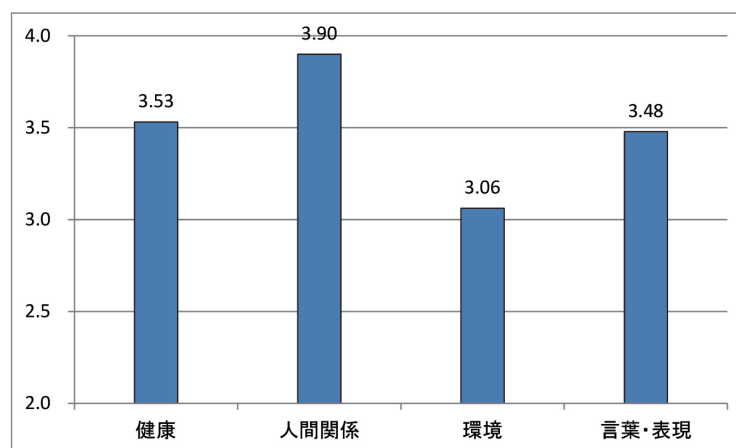


図1 領域別項目得点

一要因分散分析の結果、領域の項目得点の平均には有意差があった ($F(3,907) = 103.86, p < .001$)。多重比較の結果を表4に示す。領域「人間関係」は他領域全てと有意差があり、得点が最も高かった。

領域「環境」は他領域全てと有意差があり、得点が最も低かった。

表4 多重比較の結果

	人間関係	健康	言葉・表現	環境
人間関係		>	>	>
健康			=	>
言葉・表現				>
環境				

不等号 $p < .05$ 、等号 n.s

最も得点が高かった領域「人間関係」に当てはまるプール遊びのねらいは、「友達や先生と楽しんで挑戦したりすることを楽しむ」であった。それは遊びの外発的な動機ではあるが、幼児の遊びのスタートにある重要な動機である。

一方、最も得点が低かった領域「環境」は、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」という領域である。プール遊びに関して言えば、水という身近な環境に親しみ、水と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもち、発見を楽しんだり、考えたりし、水の性質に対する感覚を豊かにするというねらいであり、水にふれて水の美しさ、不思議さなどに気付きその性質に興味や関心をもちという水の内在的な魅力に触れるという内発的な行動を引き出すことができると考えられる。したがって、領域「環境」にプール遊びのねらいをもつことは重要な教育的配慮である。すなわち、教育の視点からみて、対象物の内在的な価値に魅了されて遊び込むという行動は、遊びから主体的な学びを得ることとなると考えられる。

2. 保育者の援助及び技能面に関する項目得点

1) 園種による比較

幼稚園と保育所と認定こども園という三つの園種の違いによって、質問項目への回答結果を比較分析するために一要因分散分析を行った。その結果、質問3「プール遊びでの安全教育は十分にできた」と質問8「プール遊びの内容については年齢に合わせてあらかじめ決めておいてから実施した」における園種の違いの効果が有意であった。統計的結果は次の通りである。

質問3：プール遊びでの安全教育は十分にできた ($F(2,226) = 4.390, p < .05$)

質問8：プール遊びの内容については年齢に合わせてあらかじめ決めておいてから実施した ($F(2,224) = 3.767, p < .05$)

園種の違いで有意であった質問3と質問8の園種別得点を図2及び図3に示した。多重比較によれば、質問3も質問8も、幼稚園と保育所の間には有意差があり、保育所より幼稚園の方が、プール遊びで安全教育が十分にでき、プール遊びの内容についてあらかじめ決めておいてから実施したという回答が多かった。認定こども園と他園種との間に有意差はなかった。結果は表5及び表6に示した。

幼稚園の方がプール遊びでの安全教育ができているという結果であった。幼稚園教育要領では、平成29年の改正前のものから、安全についての理解を深めたり、状況に応じて自分の身体を動かしたりできるようにすることは記載されていた(民秋ら、2017)。しかし、保育所保育指針では、プール活動・水遊び中の安全教育については、平成29年告知の保育所保育指針から初めて取り扱われている内容である。そのことが、プール遊びでの安全教育ができたかどうかについて、保育所より幼稚園の方が高い得点である理由なのではないかと考えられる。すなわち、安全な環境は保育者が構成するものであるという保育者主導の内容に加えて、子どもが主体的に安全を理解し、構えを身に付けるという考え方を保育の中で浸透させることが課題である。

また、幼稚園の方がプール遊びの内容を計画的に実施しているという結果であった。文部科学省は平成29年の教育要領の改正に向けて、「教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する」というカリキュラムマネジメントに関する課題を告知の数年前から幼稚園現場に課題として投げかけている。そのため幼稚園では様々な遊び活動の時期やねらいや内容を幼稚園教育全体の中でどのような積み重ねが必要かを見直してきている。その

ことが、「プール遊びの内容については年齢に合わせてあらかじめ決めておいてから実施した」について、保育所より幼稚園の方が高い得点である理由のひとつなのではないかと考えられる。幼稚園も保育所も認定こども園も幼児教育を行う施設であるという位置づけに注視して、プール遊びも子どもの重要な学びの場であることを念頭に置いて計画的な内容を進めることが課題である。

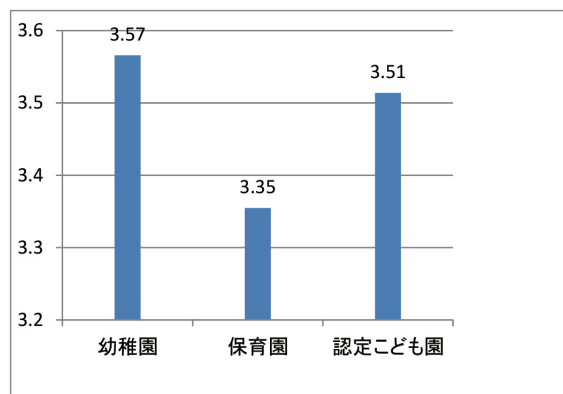


図2 園種別得点 (質問3 安全教育)

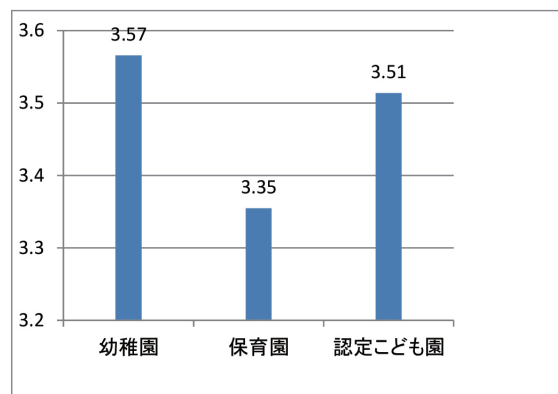


図3 園種別得点 (質問8: 指導計画)

表5 多重比較の結果 (質問3: 安全教育)

	幼稚園	保育所	認定こども園
幼稚園		>	=
保育所			=
認定こども園			
		不等号p<.05	等号n.s.

表6 多重比較の結果 (質問8: 指導計画)

	幼稚園	保育所	認定こども園
幼稚園		>	=
保育所			=
認定こども園			
		不等号p<.05	等号n.s.

2) 在籍園児数による比較

在籍園児数の違いによる質問項目への回答結果の比較分析のために、在籍園児数の度数分布から園所数が約33%ずつになるように3グループに分けて、一要因分散分析を行った。園所によっては3歳未満児が在籍するため、月齢の効果をできるだけはずすために、3歳以上児が在籍する園所だけを対象にした。在籍数が少ないグループとは6名～50名在籍、在籍数が中程度のグループとは51名～92名在籍、在籍数が多いグループとは93名～260名在籍とした。その結果、質問9、11、12、13の4項目において在籍園児数の違いの効果が有意であった。統計的結果は次の通りである。

質問9: プール遊びの内容を深めていくよう指導した。 (F(2,213) =4.100 ,p<.05)

質問11: プール遊び遊具の種類が少ないので独自で工夫した。 (F(2,218) =3.718 ,p<.05)

質問12: 十分な入水時間の確保ができた。 (F(2,219) =4.565 ,p<.05)

質問13: 5歳児ではほぼ全員潜ったり、浮かんだりすることができるようになった。

(F(2,210) =3.661 ,p<.05)

表7～表10に示した通り、多重比較によれば、4項目とも在籍園児数の少ないグループの得点が有意に高かった。

在籍者数が少ないことは、プール遊びに係る時間が長くなり、保育者が余裕をもってすすめられる環境となる。そのため、プール遊びの内容を深めていくよう指導できたり、プール遊びの遊具を独自で工夫したり、十分な入水時間の確保ができ、5歳児ではほぼ全員潜ったり、浮かんだりすることができるようになる、という項目の得点が高くなったと考えられる。逆に在籍者数が多いと、プール遊びにかかる時間が少なく、遊びも深められず、小学校低学年の体育科の「水遊び」の内容である「水の中を移動する運動遊び」及び「もぐる・浮く運動遊び」につながること

は難しくなるのではないかと考えられる。しかし、園所の在籍者数を減らすことはできないので、在籍者数が多くても、十分な入水時間を確保して遊び内容を深めていく工夫をしていくことが課題となる。

表7 多重比較の結果（質問9）

在園児数	少	中	大
少		>	=
中			=
大			
不等号p<.05 等号n.s.			

表8 多重比較の結果（質問11）

在園児数	少	中	大
少		>	>
中			=
大			
不等号p<.05 等号n.s.			

表9 多重比較の結果（質問12）

在園児数	少	中	大
少		>	>
中			=
大			
不等号p<.05 等号n.s.			

表10 多重比較の結果（質問13）

在園児数	少	中	大
少		>	=
中			=
大			
不等号p<.05 等号n.s.			

3. 公立と私立の比較

1) 各項目得点の t 検定

各項目の得点を公立と私立を比較するためにt検定を行った。結果は表11に示した通り、有意差があった項目は、質問6、7、8、9であった。

表11 公立と私立を比較した t 検定

	公立		私立		t値	
	M	SD	M	SD		
質問6: 水のふしぎさや水の性質を発見したり楽しんだりしていた。	3.15	0.52	2.90	0.68	3.11	**
質問7: プール遊びのことを楽しく話したり、絵などで表わしたりした。	3.57	0.52	3.33	0.65	3.05	**
質問8: プール遊びの内容については年齢に合わせてあらかじめ決めておいてから実施した。	3.50	0.55	3.25	0.62	3.09	**
質問9: プール遊びの内容を深めていくよう指導した。	3.20	0.57	3.00	0.69	2.29	*
* p <.05, ** p<.01						

質問6に関して、t検定の結果、公立と私立の差は有意であった（t（225）=3.17、p<.01）。したがって、私立より公立の方が水の不思議さや水の性質を発見したり楽しんだりしているといえる。

問7に関して、t検定の結果、公立と私立の差は有意であった（t（226）=3.05、p<.01）。したがって、私立より公立の方がプール遊びのことを楽しく話したり絵などで表わしたりしていたという回答が多かった。

問8に関して、t検定の結果、公立と私立の差は有意であった（t（225）=3.09、p<.01）。したがって、私立より、公立の方が年齢に合わせてあらかじめ決めておいてから実施したといえる。

問9に関して、t検定の結果、公立と私立の差は有意であった（ $t(221) = 2.29$ 、 $p < .05$ ）。したがって、私立より公立の方がプール遊びの内容を深めていくよう指導したという回答が多かった。

以上のような公立と私立の差は、前述の在籍者数の違いも原因になると考えられる。また、市町村で組織的に設定されている公的な研修を通じて、「遊びを通した総合的な学び」という幼児期の教育の捉え方が、公立の幼稚園、保育所の保育者に浸透していることが影響を及ぼしているとも考えられる。もちろん私立園でも研修の機会はあるが、園独自の教育方針や教育方法があるので、一様に幼児教育の捉え方が浸透しているとは言えないのではないかと考える。それが公立と私立の差を生じさせているのではないかと考える。そして、公立でも私立でも、プール遊びでの経験を質問6の環境や、質問7の言語や表現の領域に広げ、さらに豊かな活動にしていくことはすべての幼児教育施設で必要だと考える。

表 11 公立と私立を比較した t 検定

	公立		私立		t値	
	M	SD	M	SD		
質問6: 水のふしぎさや水の性質を発見したり楽しんだりしていた。	3.15	0.52	2.90	0.68	3.11	**
質問7: プール遊びのことを楽しく話したり、絵などで表わしたりした。	3.57	0.52	3.33	0.65	3.05	**
質問8: プール遊びの内容については年齢に合わせてあらかじめ決めておいてから実施した。	3.50	0.55	3.25	0.62	3.09	**
質問9: プール遊びの内容を深めていくよう指導した。	3.20	0.57	3.00	0.69	2.29	*

* $p < .05$, ** $p < .01$

2) プールの形態の比較および外部講師

プールの形態についての3つの質問と公立私立の項目をクロス集計し、各得点を%表示にした結果を図4～図6に示した。外部のプールは公立・私立とも90%以上の園所が利用していない。森ら（2018）は近隣のプールを利用している園所とそうでない園所との運動能力比較をしたが、明確な差はなかったと報告している。そのため本研究においては、外部プールの利用に関して特に課題は明らかにできなかった。

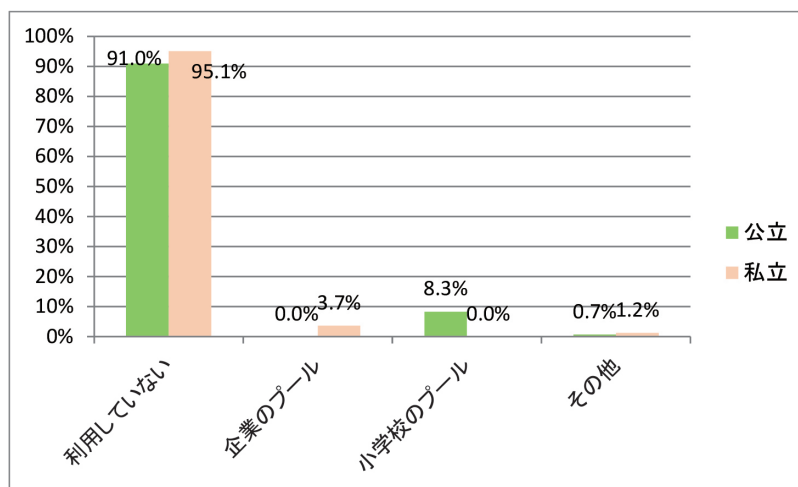


図 4 外部のプールの使用

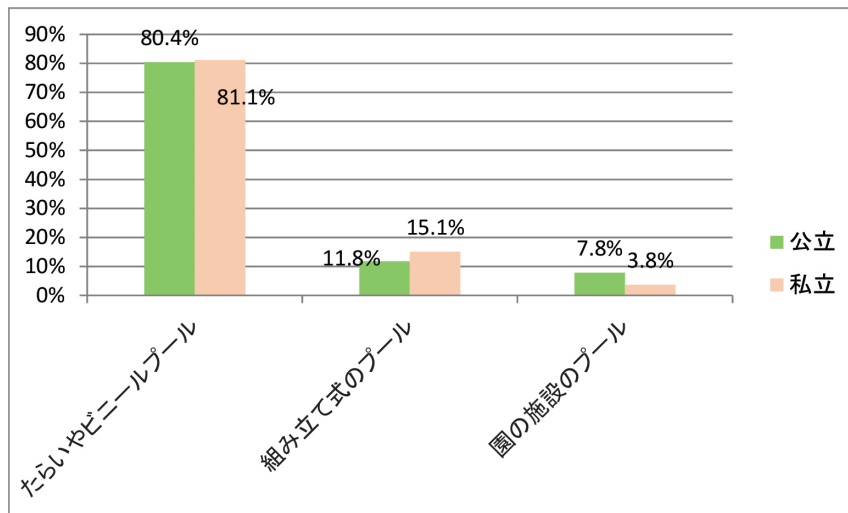


図5 3歳未満児のプールの形態

3歳未満児は、「たらいやビニールプール」を使用しているという回答が最も多く、公立では80.4%、私立では81.1%であった。公立と私立の差はないと考えられる。

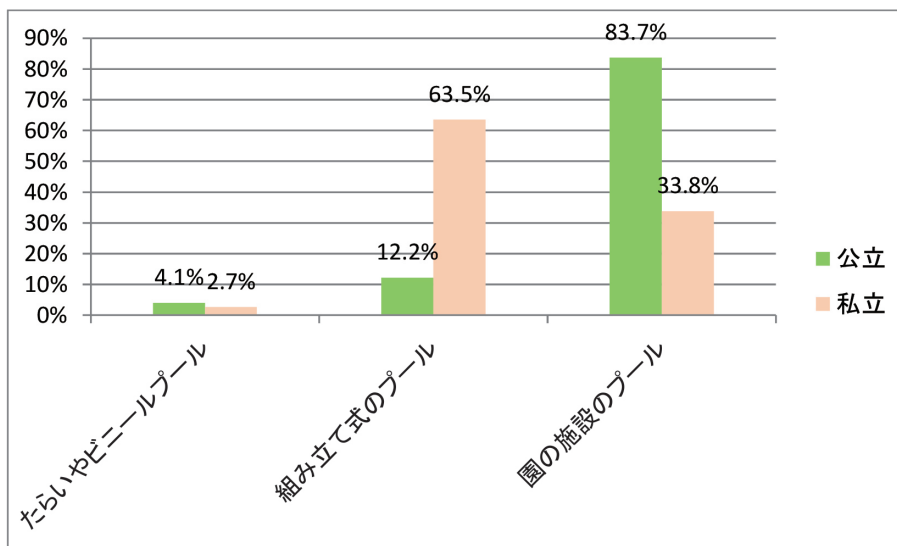


図6 3歳以上児のプールの形態

3歳以上児は、公立では83.7%が園の施設であるプールを使用し、私立では園の施設のプールの使用は33.8%で、63.5%が組み立て式のプールを使用していた。園の施設のプールを使用する場合は、準備と片づけにかかる時間が組み立て式のプールを使用する場合よりも短いと考えられる。前述の表11に示したように、公立園の方がプール遊びを総合的な遊びとして捉えていることが多いという結果であったが、使用プールの形態の違いも遊びの内容に影響を及ぼすと考えられる。しかし、新しくプールを造ることは簡単ではない。また、施設としてのプールであるからすべて、プール遊びを総合的な遊びとして捉える内容が組み込まれているとは限らない。どのようなプールの形態であってもプール遊びを総合的な遊びとして捉えて実践できるような保育計画が必要である。

3) プール遊びと「10の姿」との関わり

図7は、プール遊びとかかわりが深いと回答した「10の姿」の割合を、公立と私立別に示したものである。図7に示された通り、領域「健康」と関連すると考えられる「健康な心と体」が「10の姿」の中でもプール遊びとかかわりが深いとして実践されていた。その他、領域「人間関係」と関連すると考えられる「道徳性・規範意識の芽生え」、領域「環境」と関連すると考えられる「自然とのかかわり・生命の尊重」、領域「表現」と関連すると考えられる「豊かな感性と表現」もプール遊びとかかわりが深いとして実践されていた。

5領域からとらえたねらいでは、前述の表4に示した通り、領域「人間関係」のねらいが有意に最も強く実践され、領域「環境」のねらいが有意に最も弱かった。本研究では、「10の姿」に関わる質問14の回答を上位2つの選択式にしたため、他の質問項目の尺度と統計的な比較はできないが、5領域からとらえたプール遊びのねらいと「10の姿」からとらえたプール遊びのねらいは同様のものではと言えないと考える。

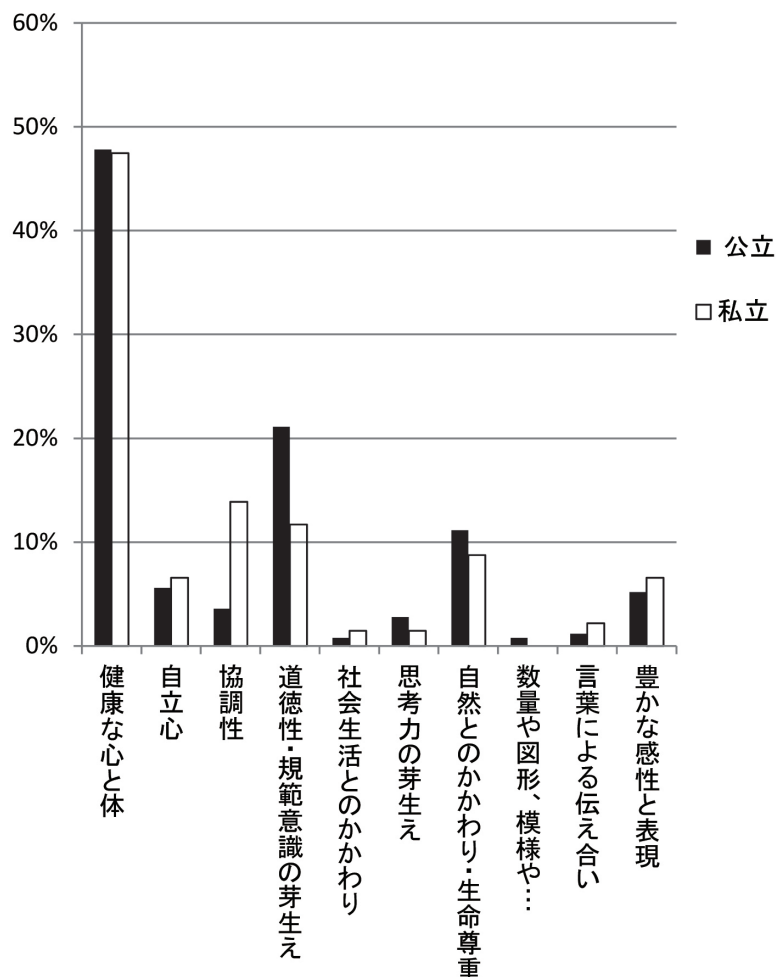


図7 プール遊びと関わりが深いと回答があった「10の姿」

5領域というのは、保育の内容を発達の視点からみた分類であり、「10の姿」は幼児期の終わりまでに育ててほしい方向性としての具体的な幼児の資質・能力が示されている。すなわち「10の姿」の選択結果から、プール遊びが目指す方向性をどのように意識して実践しているかが読み取れる。

本研究の結果から、方向性として「自然とのかかわり・生命の尊重」を意識しているが、領域

「環境」の視点から見ると他の領域に比べて不十分な保育内容となっていた園が多かったのではないかと考えられる。5領域のねらいでは「楽しむ」「挑戦する」などの抽象的な語句が多く使われているが、教育的な視点から考えると、具体的に「何を楽しむのか」「何に挑戦するのか」などの内在的な価値を重視し、プール遊びだからこそ経験できる領域「環境」を含んだ保育内容の実践の充実が望まれる。

まとめ

本研究は、幼稚園・保育所・認定こども園でのプール遊びのねらいが、どのようなねらいをもって実施されているのかその実態を明らかにし、プール遊びの課題を見出し、教育的な視点から検討することを目的とした。N県の公私立の幼稚園・保育園（所）・認定こども園367園を対象に、調査用紙を郵送にて依頼し回答を回収した。回収数は229園、回収率は62.4%であった。

分析結果から明らかになった園所のプール遊びに関する現状と課題は次の3点である。各課題に対して今後の望ましい方向性を考察した。

1. 5領域からとらえたプール遊びのねらいと「10の姿」からとらえたプール遊びに関連するとされるこどもの姿が一致しないままプール遊びが実践されている。

領域「人間関係」は有意に最も強くねらいとして実践されており、領域「環境」へのねらいは有意に最も弱いねらいとして実践されていた。一方、「10の姿」からプール遊びにかかわりが深いものとして、領域「健康」に関すると考えられる「健康な心と体」および領域「環境」と関連すると考えられる「自然とのかかわり・生命の尊重」を選択した園が多かった。

今後、領域「環境」にプール遊びのねらいをもつことで、「水」という対象物の内在的な価値に魅了されて遊び込むという行動が予測され、教育的な視点からみて、遊びから主体的な学びを得ることになると考えられる。また、領域「環境」だけでなく、公立園と私立園の間でねらいに有意な差が見られた領域「言葉」「表現」の中にもねらいをもつことで、対象物の内在的な価値に魅了されて遊び込む行動が予測される。これらのことから、プール遊びでは、園種に関係なく幼児教育施設として「5領域」や「10の姿」を共有すべき事項として意識し、実践に向けて総合的に展開していくことが望まれる。

2. 園種の違いにより、安全教育および保育計画に相違がある。

保育所より幼稚園の方が、プール遊びで安全教育ができており、プール遊びの内容についてあらかじめ計画を立てて実施していた。認定こども園と他園種との間に有意差はなかった。

プール遊びでは、安全な環境を保育者が構成するものであるという保育者主導の内容に加えて、子どもが主体的に安全を理解し、構えを身に付けるという考え方を、園種に関係なく幼児教育施設として保育の中で浸透させることが必要である。そして、幼稚園も保育所も認定こども園も幼児教育施設であるという位置づけに注視して、子どもの生活する姿や発想を大切に適切な環境を構成し、子どもが主体的に活動できるように、プール遊びは子どもの重要な学びの場であることを念頭に置いて計画的な内容で進めることが課題である。

3. 在籍園児数およびプールの形態により、遊びの深まり、初歩的な水泳技能の獲得に相違がある。

在籍者数が多い園より少ない園の方が、遊びの深まりや初歩的な水泳技術の獲得が有意にできていた。しかし、実際は、園所の在籍者数を減らすことはできないので、在籍者数が多くても、

遊び用具を工夫し、十分な入水時間を確保するなど遊び内容を深めていく工夫をしていくことが課題となる。

しかし、初歩的な水泳技能の獲得に関しては、遊びの工夫も容易ではないと考えられる。公立園では83.7%が園の施設であるプールを使用し、私立園では園の施設のプールの使用は33.8%で、63.5%が組み立て式のプールを使用していた。また、前述の表11に示したように、公立園の方がプール遊びを総合的な遊びとして捉えていることが多いという結果から考えると、プールが施設として備わっていることが遊びの内容に影響を及ぼすと考えられる。しかし、新しい施設としてプールを造ることは簡単ではない。在園児数が多く、広くない組み立て式プールであれば余計に、潜ったり浮かんだりする遊びを取り入れて、5歳児がほぼ全員潜ったり浮かんだりすることができるようになるという水泳の技能面での基礎づくりには不十分だと考えられる。

乳幼児教育には、生きる力の基礎を育むために資質・能力を一体的に育むよう努めるという使命がある。そのため、園所のプール遊びでは、「知識及び技能の基礎」という面における、基礎的な水泳の技能ができるようになるということだけでなく、プール遊びの中で感じたり気付いたり分かたりすることもねらいとして大切に、心情・意欲・態度が育つ中で「学びに向かう力」等の基礎づくりをさらに充実させ、小学校の体育科とスムーズに接続していくことの方が園所ではより重要な役割となるのではないかと考える。

文献

- 藤田美子（1998）プール遊びに見られる音楽的な熱中。幼児の教育。日本幼稚園協会97（8）、4-12。
- 藤田公和・中野 真知子（2017）幼稚園・保育所における水遊び・水泳指導の実態と小学校体育「水泳」との系統性・連携について。桜花学園大学保育学部研究紀要。15.127-135。
- 厚生労働省（2017）保育所保育指針。フレーベル館。
- 厚生労働省（2019）幼保連携型認定こども園の学級編成、職員、設備及び運営に関する基準
- 三井登（2013）幼児期における運動技術の系統的指導に基づく遊びの方法。帯広大谷短期大学紀要。50.117-125。
- 文部科学省（2014）幼稚園設置基準
- 文部科学省（2017）幼稚園教育要領。フレーベル館。
- 森司郎・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・杉原隆（2018）幼児の運動能力の現状と運動発達促進のための運動指導及び家庭環境に関する研究、平成27～29年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）、研究成果報告書。21。
- 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子（2017）ここがポイント！3法令ガイドブック。
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）幼保連携型認定こども園教育・保育要領。フレーベル館。
- 民秋言・西村重稀・清水益治・千葉武夫・馬場耕一郎・川喜多昌代（2017）幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と変遷。萌文書林。
- 渡部昌史・斎藤健司・岡本直行（2017）子どもの水遊びについて—保育者養成の観点から—。新見公立大学紀要。38.161-165。